

日本 戦闘の 者



荒谷 卓 (あらや たかし)
生年月日：昭和34年秋田県出身
略歴：昭和53年東京理科大学、陸上自衛隊に入隊、第19普通科連隊、調査学校、第1空挺団、第39普通科連隊、陸上幕僚監部防衛部、防衛局防衛政策課戦略研究室等に勤務。平成16年特殊作戦群初代群長に就任。平成20年依願退職(1等陸佐)。海外留学：ドイツ連邦軍指揮大学及び米国特殊作戦学校。
平成21年9月～30年10月、明治神宮武道場至誠館館長。
平成30年11月三重県熊野市に「国際共生創成協会 熊野飛鳥むすびの里」設立、代表を務める
著書：『戦う者たちへ』『サムライ精神を復活せよ』『特殊部隊vs.精鋭部隊—最強を目指せ』並木書房／『自分を強くする動かない力』三笠書房
熊野飛鳥むすびの里のHPアドレス
<https://musubinosato.jp/>



ここしばらく、俺の身の上話に付き合ってもらったが、ここところ国際情勢がかなりきな臭くなってきたので、今世界がどのようになっているのかについて話をしよう。今は百姓おやじをやっているが、こう見えても俺は、防衛庁では国際情勢分析の専門家だったんだよ。それも、現状だけではなく情勢の長期的情勢推移を見積もる担当だ。そもそも日本の戦闘者は情勢分析に長けているんだ。なぜかという、日本文化の特徴の「思いやり」は、「人の心を読む」心術が得意。これは欧米にはない特徴だ。自分本位の連中には、人の心に対する配慮がないので、科学的心理戦のような理論に頼れない。ところが日本人は文化的感覚で相手の気持ちに気を使う癖があるから、そんなものに頼らなくても自動的に心を読む。戦前までの軍人の世界情勢感覚は今とは比べ物にならないほど優れていた。

国家としても自立していたから、独自に海外情報を収集し分析していた。ところが、戦後は、米国から海外情報を収集する政府機能の保有を禁止され、国際情勢判断は米国から与えられた情報に頼るようになってしまった。メディアも米国が検閲していたものが、そのまま内部規定化し、米国の意図に沿った偏向報道しか流さなくなった。戦後は、こうして米国による情報による管理体制が確立したわけだ。だから、テレビ等で国際情勢を語る連中の話は、頭が馬鹿になるから聞かないほうがいい。さらに、コロナ以降は、ほとんどまともな報道がなされなくなってしまった。これは報道ではなく明らかに洗脳活動だ。そして今、全部嘘ばかりなのウクライナ関連報道だ。これは、日本国家の存続にかかわることだから見逃すわけにはいかないよ。

まず、情勢分析をする際には、思い込



戦艦「ニュージャージー」艦上で、米軍の服に着替えるため体を洗わされる日本人捕虜。1944年12月。

みや先入観を排除しなくてはならない。これがあると、客観的な分析が出来なくなる。「日米同盟ありき」や「グローバル化の中での経済成長」を前提として情勢判断をしていたのでは、戦略的思考は生まれにくい、戦略の間違ひは戦術ではリカバーできない。

現在、国際環境に大きな変化をもたらすキーパーソンは、ロシアのプーチン大統領である。冷戦後以降の世界のトレンドであった新世界秩序(民主権国家を廃絶しパワーエリートをトップとする地球レベルでの政治・経済・金融・社会政策の統一、究極的には末端の個人レベルでの思想や行動の統制・統御を目的とする管理社会の実現を目指すもの)に終止符を打ち、「主権国家から成る多様な世界の構築」を目指すプーチンの動向を正確に読み解けないとこれからの世界情勢は見えてこない。

ところが、戦後の日本人のソ連・ロシアに対する敵対意識は、米軍占領以降、徹底的に刷り込まれた感がある。大東亜戦争末期、突然、ソ連が日ソ中立条約を破棄し対日宣戦布告をして満州から日本を追いだし、1945年8月15日以降も占守島から北方領土迄を不当に占領した憎き敵国。さらに日本人捕虜のシベリア抑留やら、北方4島を返還しないやらで、ロシアは極悪非道の国とされてきた。自衛隊では、仮想敵国ソ連の侵攻から日本を防衛するのが主たる任務とされていた。こうした感情を持ったまま、国際情勢を見ていると取り返しのつかない過ちを犯すことになる。

では、歴史をさかのぼって事実関係を確認しよう。まず、大東亜戦争のロシア参戦について。1941年12月8日、日本が真珠湾奇襲攻撃をしたその日、予め準備していたように米国はソ連に対し対日参戦要請をしている。スターリンはこれを却下した。それ以降も米国のソ連に対する対日参戦要求は執拗に続き、1945年2月8日、クレミアのヤルタで米国ルーズベルト、英国チャーチル、ソ連スターリンが3者会議を開催し約束を交わした。その内容は、「ドイツ降伏から2〜3ヵ月以内にソ連は対日参戦する」「樺太及び千島列島はソ連に割譲する」というものだった。ルーズベルトは、ソ連の対日参戦を引き出すため、スターリンに対し対日中立条約の破棄を求め、終戦までに軍事占領したすべての領域をソ連に無条件で提供するとした。スターリンは米英の要請に従い、ドイツ降伏の3ヵ月後の8月、対日参戦を布告する。しかし、当時のソ

連には千島列島を攻撃するための海上輸送能力がなかった。そこで、米国はソ連に「プロジェクト・フラ」と呼ばれる米ソ合同軍事作戦を提案し、1945年5月から9月、掃海艇55隻、上陸用舟艇30隻、護衛艦28隻等145隻の艦船をソ連軍に無償貸与し、4月から8月にはソ連兵約12,000名を米国アラスカ州コールドベイの基地に集め、艦船やレーダーの習熟訓練を行った。つまり、9月2日の降伏文章調印迄、米ソ合同作戦で北方4島を含む千島列島の軍事占領を果たし、約束通りソ連の領土としたわけだ。

終戦後の極東軍事裁判においては、A級戦犯の死刑判決で11人の裁判官のうち死刑に反対したのは3人だけ。インドのパール判事、ソ連のザリヤノフ判事そして裁判長のウェップ判事。オーストラリアの ウェップ判事は、白豪主義いわゆる人種差別主義者で、天皇の追訴をはじめ日本人への報復に最も強烈な意見を持っていたが、ニュールンベルグ裁判においても判事をしてきたことから、ナチスドイツの行った犯罪行為と比較し、被告の行為はどう見ても死刑に該当しないと判断から反対したものだ。日本の戦争犯罪に対し、インドのパール判事が反対したことはよく知られているが、ソ連のザリヤノフ判事も反対したことはほとんど知られていない。

また、外国での裁判において戦犯として死刑判決を受けた日本人及び捕虜収容中に死亡した日本人の数は、シベリア抑留中の自然死も含めたソ連では、日本政府発表で55,000名。これに対して、アングロサクソンの英米豪での日本兵死者数は日本政府発表で50,000名これプラス81,000名の死亡が確認されている。たとえば、大西洋横断飛行で有名なリンドバーグの戦場日誌によれば「各地の太平洋戦線で日本人捕虜の数が欧州戦線に比し異常に少ないのは捕虜にしたければいくらかでも捕虜に出来るが、米兵が日本人捕虜を取りたがらず、手を上げて投降してきても皆殺しにするから」「一旦捕虜にしても英語が分かる者は尋問のため連行され、出来ない者は捕虜にされなかった、即ち殺された」「捕虜を飛行機で運ぶ途中機上から山中に突き落とし、ジャップは途中でハラキリをやっちゃったと報告した」「ある日本軍の野戦病院を米軍のある部隊が通過したら生存者は一人もいなかった」「2年以上実戦に参加した経験がない兵が帰国前にせめて一人くらい日本兵を殺したいと希望し、偵察任務に誘われたが撃つべき日本兵を見つけられず

捕虜一人だけ得た。捕虜は殺せないと嫌がるくだんの兵の面前で軍曹がナイフで首を切り裂く手本を示した」「捕虜にしたがらない理由は殺す楽しみもさる事ながらお土産を取る目的。金歯、軍刀はもとより、大腿骨を持ち帰りそれでペンホルダーとかペーパーナイフを造る、耳や鼻を切り取り面白半分に見せびらかすか乾燥させて持ちかえる、中には頭蓋骨まで持ちかえる者もいる」等々戦場での実態を生々しく描いている。そして、「日本人を動物以下に取扱いそれが大目に見られている。我々は文明のために戦っているのだと主張しているが、太平洋戦線を見れば見るほど、文明人を主張せねばならない理由がなくなるように思える。事実この点に関する成績が日本人のそれより遥かに高いという確信は持てないのだ」とし、ドイツ降伏後ナチスによる集団虐殺現場を見学した時の日記で「どこかで見たような感じ、そう南太平洋だ。爆撃後の穴に日本兵の遺体が腐りかけ、その上から残飯が投げ捨てられ、待機室やテントにまだ生新しい日本兵の頭蓋骨が飾り付けられているのを見たときだ。ドイツはユダヤ人の扱いで人間性を汚したと主張する我々アメリカ人が、日本人の扱い方で同じようなことをしでかしたのだ」と記述している。

こんなアメリカ兵でさえ、「オーストラリア人よりはましだ」と答えている。大東亜戦争中、オーストラリアのニューサウスウェールズ州カウラの日本人捕虜収容所で起きた事件では、歴史上最悪の231名の日本人捕虜が一挙に殺害された。国際赤十字はこの事件を検証し、戦後の日本政府に対し、これは歴史上に残るホロコーストであるから提訴するように申し出た経緯がある。ところが日本政府は、提訴するどころか、この事件を全く無視している。

俺は、ロシアの日本人捕虜収容所を直接見に行った。ここでは、日本人捕虜は礼儀が正しいからということで、出入り自由で、その村の家に食事に招かれたり、村の娘さんと結婚し

たりしていたという。そして亡くなった日本兵の墓はいまだに奇麗に地元の人たちが守っていた。英米豪の連中が、戦後日本兵の墓を掘り起こして遺骨を投げ投げブルドーザーで潰したのとは全く違う。

プーチン大統領が最初に日本に来たとき、外務省の予定をキャンセルしてまでも、講道館へ行きたいと言った当時のことを、講道館関係者に聞いたんだが、外務省の職員が来て、国賓のプーチン大統領が講道館へ来たいというから、赤の絨毯を引くように要請したらいい。しかし、講道館としては神聖な道場に絨毯引いたからといって、土足で道場が上がってらうては困ると言ったが、外務省は国際慣例として国賓に靴を脱げということはできない、講道館は目をつむってもらえないという押し問答があったという。講道館の方はやむなくレッドカーペットを引いて土足で上がってもらいたい演武等を見てもらう準備してたらいいよ。そしたら、実際にプーチンがやって来たら、靴を脱ぐどころか靴下まで脱いで、しかもカーペットを外して、自分の生涯の師と仰ぐ加納治五郎先生に深々とあいさつしたそう。そして、講道館が準備していた名誉段を渡そうとしたら、「いや、自分はそういう段位をもらうのにふさわしい人格も技量もない」と。でも、困った様子の行動間の人々に配慮し、プーチンは「分かりました。これは加納治五郎先生が自分に対して人生の課題を与えたものと理解し、段位にかなう人間になるよう精進いたします」と言ったという。こんな欧米の大統領なんか見たことねえよ。英米にとっては、日本がロシアや中国が組むと手に負えなくなるから、絶対に手を組ませない。いわゆる「敵は対立させて管理する」というアングロサクソンの戦略にまんまとはめられているのが今の日本だよ。



米軍によって襲撃され虐殺された病院の日本兵。